

## 『問われている内実』

ローマ人への手紙 2章 25～29節

青木 信太郎 牧師

### ◆ ユダヤ人の割礼

前回、パウロはユダヤ人の誇りと主張はすべて実質が伴わない偽善であり、神を侮っていることに他ならないと鋭く指摘しました。律法はユダヤ人が神の選びの民であると主張してきた絶対的支柱でしたが、それに続いてユダヤ人のもう一つの絶対的支柱である「割礼」について鋭く指摘します。割礼はユダヤ人が神の選びの民であることのしるしでありました。

皆さんもご存知の通り、割礼とは男性器の包皮をナイフで切り取る儀式のことです。一般的には二つの意味があり一つは衛生的な目的で、もう一つは宗教的目的のためです。割礼は様々な地域や諸民族で現在も行われている習慣です。しかしユダヤ人における割礼は聖書に基づく儀式です。そもそも割礼が最初に教えられたのは創世記においてです。【創世記17章9-14節】ここで明らかなことは、割礼は単なる宗教的儀式ではなく契約であるということです。そしてこれは神様とアブラハムとの間で結ばれた契約でした。アブラハムが99歳のとき、まだ名前はアブラムでしたが、神様はこう言われました。【わたしは全能の神である。あなたはわたしの前に歩み、全き者であれ。わたしは、わたしの契約を、わたしとあなたとの間に立てる。わたしはあなたを大いに増やす。～これが、あなたと結ぶわたしの契約である。あなたは多くの国民の父となる。あなたの名は、もはや、アブラムとは呼ばれない。あなたの名はアブラハムとなる。わたしがあなたを多くの国民の父とするからである。～わたしは、わたしの契約を、わたしとあなたとの間に、またあなたの後の子孫との間に、代々にわたる永遠の契約として立てる。わたしは、あなたの神、あなたの後の子孫の神となる。(創世記17章2-7節抜粋)】神様はアブラハムとその子孫たちを祝福し、代々に至るまでアブラハムとその子孫たちの神であることを約束するという契約をアブラハムと結んでくださいました。そしてその契約のしるしとして、アブラハムにもその後の子孫にも男子は皆、生後八日目には包皮の肉を切り取る割礼を受けることを命じられたのです。それは奴隷であっても、召し抱えた異国人であっても、アブラハムの家に属する者は皆、割礼を施すように神様は教えられたのです。そしてアブラハムを祖先とするユダヤ人は皆、代々、このアブラハム契約のしるしである割礼を守り続けてきたのです。また、割礼はモーセの十戒、律法が与えられるシナイ契約の数百年以上前から与えられたアブラハム契約のしるしでありました。

### ◆ 外見上の割礼

パウロは祖先アブラハムの時代に与えられた契約のしるしである割礼を守り行っているユダヤ人に対して、その本質が全くもって失われていることを指摘します。【25-27節】パウロはここで、ユダヤ人が神の選びの民であると主張し誇りにしている「割礼」と「律法」が密接な関係にあることを説明します。25節でパウロは、律法を守り行えば割礼に価値を見出すことができるが、律法を守ることができないなら割礼は無意味、無割礼であると説明します。つまり、身体に割礼を施していることだけでは何の意味も見出すことは出来ない、不完全であると云うのです。アブラハム契約における神様の御言葉は【わたしは全能の神である。あなたはわたしの前に歩み、全き者であれ(創世記17章1節)】で始まっています。全能者である神様の前に全き者であることのしるしが割礼なのです。アブラハムに始まりその子孫たちは、全能者の神の前に全き者であることのしるしとして割礼を施すことが本質でなければなりません。“全き者”とは「神との関係における健全さ、完全さ」を表す言葉です。ダビデは詩篇18篇において「自らの罪から身を守る者が主の前に全き者である」と歌いました。イエス様は山上の説教において【ですから、あなたがたの天の父が完全であるように、

完全でありなさい】と教えられました。全き者が神の民であり、その契約のしるしとして割礼を施すことに本質があるわけです。すなわち律法を完全に守り行う全き者であるならば、そのしるしとしての割礼は大いに価値があるとパウロは説明します。しかし前回の箇所でも語られていたように、他人を教えながら自分自身を教えない、律法を誇りとしながら律法に違反して神を侮っているならば、割礼は無意味、無割礼であると指摘するのです。更にパウロは26, 27節において「もし割礼を受けていない異邦人が律法を守り行っているとしたら、その人は例え身体に割礼が施されていなくても割礼を受けている神の契約の民とみなされるでしょう。だとするならば、無割礼でも律法を守る異邦人は、割礼を受けながらも律法を守らないユダヤ人を裁くことができることになりませんか」と。これは2章の最初で【ですから、すべて他人をさばく者よ】とユダヤ人を指してパウロは表現しましたが、律法と割礼において全く本質が伴わないあなたたちこそ、さばかれる側になりうることを皮肉交じりで語っているのでしょう。実のところユダヤ人も異邦人も律法を守り行うことは出来ないのです。

そしてパウロははっきりと語ります。【28節】ユダヤに生まれたユダヤ人が神の選びの民であるユダヤ人ではなく、同様に身体に割礼が施されている者が神の契約の民でもない。外見上の形だけの割礼は、神の選びの民、契約の民のしるしとはならないと指摘するのです。

#### ◆ 心の割礼

そしてパウロは割礼の本質を伝えます。それは紛れもなく福音でありました。【29節】「人目に隠れたユダヤ人がユダヤ人である」とは、外見上、形だけのユダヤ人ではなく、神の選びの民、契約の民として実質を備えている者こそ真実のユダヤ人であるということです。その実質とは目に見える形ではなく内実であり、それは“心の割礼”と教えます。【あなたがたは心の包皮に割礼を施しなさい。もう、うなじを堅くする者であってはならない(申10章16節)】【ユダの人とエルサレムの住民よ。主のために割礼を受け、心の包皮を取り除け(エペ4章4節)】神の前に義と認められるのは律法を守り行う者であり(ロマ2章13節)、全能の神の前に全き者がそのしるしとして割礼を受けることが本質なのです。しかし私たちは知っています。私たちもユダヤ人も律法を守り行うことが出来ない罪人であることを。ではどうしたら良いのでしょうか？【29節 文字ではなく、御霊による心の割礼こそ割礼だからです。】“文字”とは律法です。すなわち律法を守り行うことが出来ない罪人がどうしたら義と認められ全能の神の前に全き者となることができるのか、それは【御霊による心の割礼】を受ける他ないのです。“御霊による心の割礼”とはイエス・キリストの十字架と復活によって罪赦され義と認められるという信仰に他なりません。この信仰は聖霊なる神様によって私たちに与えられる特権なのです。「私たちは、義とされる望みの実現を、信仰により、御霊によって待ち望んでいるのですから。キリスト・イエスにあって大事なものは～愛によって働く信仰なのです(ガラテヤ5章)」イエス様の十字架と復活によって罪が赦され義と認められると信じる信仰こそ御霊による心の割礼なのです。信仰は目に見える形ではなくその人の内実です。神の罪に対するさばきが来るその時に問われているのは内実です。ユダヤ人であるとか、割礼を受けているのではなく、イエス様を救い主と信じる信仰が問われるのです。

#### ◆ お勧め

罪人の結末は永遠の滅びです。私たちは自らの努力で罪を拭き去ることは出来ません。律法を守れず、外見上の割礼は無意味です。私の罪を赦して贖うためにイエス様は十字架に掛かり、復活して下さったことを信じる信仰によってのみ私たちは義と認められて救われるのです。この信仰こそ心の割礼です。教会における割礼の儀式とは洗礼式です。今こそイエス様を救い主と信じて洗礼を受けて戴きたいのです。御霊による心の割礼は今、あなたに届けられています。教会の皆さん。形だけのキリスト者ではなく絶えず自らの罪を悔い改め、イエス様の十字架と復活の恵みを感謝する日々を歩んで参りましょう。そしてこの町の多くの人々の心の中にキリストの福音を届けるために、私たちの教会は用いられたいのです。